

幕府御林山における林業生産

——伊豆天城御用炭年季請負製炭について——

浅井潤子

目次

はじめに

一 御用炭生産地としての天城御林山

二 天城炭製炭の沿革

三 年季請負製炭仕法

製炭請負年季と請負人の交替経緯

請負条件

①証換金 ②運上金の納入 ③冥加植栽 ④御風呂屋口御用炭と炭価

炭木の制限

四 製炭の実態

炭 電

焼 出 高

製炭労働者

おわりに

はじめに

木炭は、古くより我が国の重要な燃料資源として欠くことの出来ないものである。その消費量が老大であったことは想像にかたくない。ことに江戸時代になってからの炭の需要は、城下町の発展に伴なってさらに増大した。江戸・大坂・京都など代表的な消費都市の薪炭需要は、これら周辺の生産地産出量だけでは到底供給出来るものではなかった。なかでも江戸の木炭は、直接の供給地として「諸色直段引下」に「武蔵 伊豆 相模 駿河 甲斐 遠江 常陸 上野 下野 上総 下総 安房一二ヶ国」と列挙している如く、関東広域地方にまで及んでいる。

しかし木炭は主要な生活必需品にもかかわらず、一般には農民の副業的生産が主であったためか、今日炭の生産構造をうかがいうる具体的な事例は、他の生活物資に比して極めて僅少である。したがって薪炭に関する研究も販売機構の解明を除いては、従来余り進んでおらず、二、三の先学の労作をみるにとどめる⁽¹⁾。

このことは一に幕府御林山のみでなく、諸藩にあってても、薪炭を国産として指定しながら、生産そのものが藩営である場合は少く、むしろ販売に重点がおかれていたことによっても判明出来よう。

生活必需品以外の木炭使用は、武器製作などの鍛冶炭にも相当の量を消費している。幕府自体これら鍛冶炭をはじめとして、江戸城御台所用炭などに、多量の木炭を消費していたであろうことは容易に推測できるが、果たしてこの需要をどの様に満たしていたか。

そこで小稿では、幕府の所謂御用炭（江戸城本丸・西丸兩丸御風呂屋炭を含む）の供給地の一つと考えられる伊豆国の天城御林山において、幕府が特定の請負人に御林山の用材を下附して、年季製炭させた天城炭の生産機構を、残存する史料にそくして究明を試みた。宝暦期に創始された年季請負製炭が、明治の通商会社に引きつがれるまでの約一〇〇

年間を通じて、どの様にして御用炭の製炭が施行されたか。具体例に基づいて史料紹介をしつつ考察することにより幕府御林山における林業生産の一端が、少しでも明らかにすることが出来れば幸甚である。

註

(一) 寺尾宏二氏「天城御用炭考」(歴史地理第七十七巻一・

二・三号) 日本木炭史編纂委員会編(樋口清之氏編)「日

本木炭史」(昭三五) 東京管林局編「伊豆林政史」(昭三九) 日本学士院編「明治前日本林業技術発達史」(昭三四)

一 御用炭生産地としての天城御林山

天城御用炭とは、その名の示すごとく、伊豆天城御林山において、御用林の原材下附によって製炭され、江戸に回漕されるものをいう。

本題に入るまえに、まず天城御用炭の生産された天城御林山の概略をのべることにする。

周知のように、天城山は古くは狩野山の名称で知られ、東鑑の元暦二年(一一八五)二月の条に「於_二狩野山_一日来被_レ求_二材木_一」とあり、また承元二年(一二〇八)閏四月八日に「神宮寺造管材木自_二伊豆国狩野山之奥_一出_二河津海_一」と記されている如く、多くの良材を採出した美林であった。

さらに北条氏時代には、あらたに狩野山に檜奉行を任命して狩野山の管理保護がなされ、とくに御用林として重要な地位を占めていた。

徳川時代になって、幕府がこの天城山を正式に御林山として設定した年代は詳らかでないが、御林山としての管林施策は、着々と実行されていた。

はじめに、天城御林山の範圍および地理的条件を、安永八年（一七七九）の「御林帳」によってみると

一天城山御林

東西江拾三里程
南北江六里程

湯ヶ嶋口
河津口
仁科口
大見口

反別木数不知

但、南方麓より河津迄陸路貳里、夫より江戸迄海上三拾三里、陸路三拾六里

此 訳

北ノ方湯ヶ嶋口
（狩野口）

山上不立より麓迄難所三里余、麓より田沢村河岸迄半道程
河岸より駿州沼津浦迄川路八里、夫より江戸迄海上七拾四里

南ノ方河津口

山上より麓迄嶮難所三里余、麓より河津川岸迄貳里、夫より江戸迄四拾五里

西ノ方仁科口

山上より一色村川岸迄難所四里余、仁科浦迄川路壹里余、夫より江戸迄海上六拾三里

東ノ方大見口

山上より宇佐美浦迄難所嶮難所六里余、夫より江戸迄海上三拾里

と、天城御林山の範圍を、東西拾三里・南北六里と記している。これは現在の静岡県田方・加茂二郡に跨がる約四万余町歩に及び、伊豆半島の約三分の二を占める広大な林地である。

この広範圍な御林山を、幕府は元禄十一年（一六九八）時の三島代官（設楽喜兵衛）に命じて、河津・仁科・狩野（のちの湯ヶ嶋）・大見口の四口に区画し、御林地付村五十四カ村を設定した。そして四口にそれぞれ御林守を一人づつおき、一人ニ付三石五斗（三斗五升入拾俵）を給付し、御林の管理・保護の任にあたせられた。実際には、御林守の「大造成山にて、往返見廻一日ニ難相成ニ付」³との訴えにより、元禄十五年（代官小長谷勘左衛門）に、野扶持として四口で

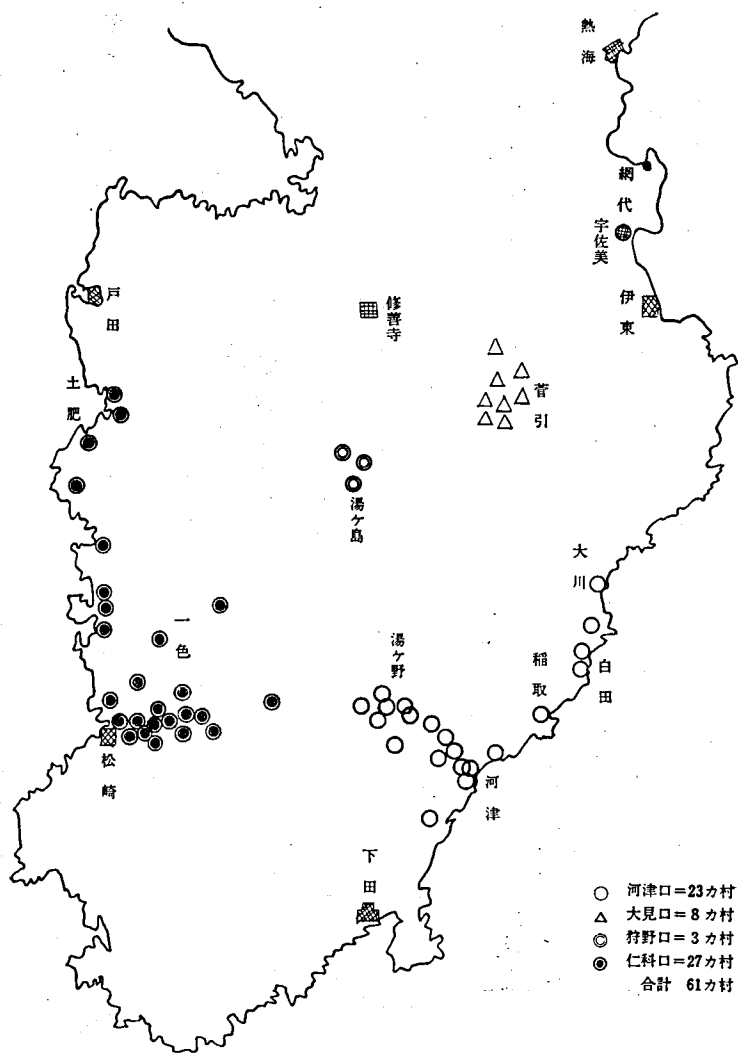
老人扶持を増加された。この給与はさらに文化一〇年（一八一三）には、御手当金三兩、木錢・米代として金三分永百七文、筆墨紙・蠟燭代として金壹分 永百七拾八文六分、合金四兩壹分 永三拾五文六分の増手当を支給されるようになったが、これは御用炭焼出のための増給であつた。人数も「此山之儀甚、場所至而嶮阻^ニ而、四人^ニ而も廻りかね場所有^ニ之」として、給与は四人分で、現在数は「湯ヶ島口^ニ三人、川津口^ニ貳人、仁科口^ニ老人、大見口^ニ老人、都合七人^ニ而相勤め」ていたのである。この様にして任命された御林守が、現地の御用炭請負焼炭を直接監督した。元禄一一年御林四口地付村設定後の天城御林山の管理組織は、御林帳の記載などの事務的機能は御林奉行がこれを施行し御林山の材木松下処分、御用炭の製炭請負人撰定、炭木・炭竈の設定、津出し業務などは、すべて御勘定所配下の御普請役・吟味役が、直接幕府御勘定所の命により代行した。そして御林守がこれら幕吏の助手的な役割を現地で果たし、代官所は幕府勘定所の命令を下達する連絡機関であつた。（天城御林山の管林施策については、別稿にゆずる）

つぎの分布図は、安永八年（「御林帳」の作成された年代）に設定された御林四口地付村の位置と、四口の区分の概略を示し、そのあとに地付村村名一覧を附記した。なお村名書の前書は、地付村の支配領主名であるが、無記名はすべて天領である。

御林山を四口に区画し設定された地付村は、元禄設定当初五十四カ村であつたが、安永八年には六十一カ村に、さらに天保五年（一八三四）には百二拾カ村と約二倍に増加している。第1表はその増加数を表示したものであるが、この倍増は、幕府が漸次周辺の地続山を御林山に組込んで行った結果といえよう。幕末期ではあるが、つぎの引用史料によって、地続山を組込んで行く経過の一端が利解出来る。

天城山御林附村分布図

(安永8年現在)



天城山御林附村名一覽（安永8年）

河 津 口			仁 科 口		
太田備中守領分	梨本村	計 22 (23) 村	岩瀬加賀守知行	一色村	湯ヶ島村 山原村 力村
溝口辰蔵知行	下佐野村		太田備中守知行	井田子村	
太田備中守領分	下筏場村		同	田子村	
同	矢野筏場村		同	宇久須村	
同	沢田中村		間部式部知行	安良里村	
同	田中原村			土肥村	
	笹原村			小土肥村	
	浜高村		大久保安芸守領分	小下田村	
	見峯谷津村		太田備中守領分	八木沢村	
	縄逆北ノ沢村		同	中浜村	
太田備中守領分	鍋取村	計 26 (27) 村	岩瀬加賀守知行	大沢里村	大沢村 中宮内村 建久寺村 船田村 伏倉村 同松田村 桜池代村 吉輪村 明伏奈村 江南門野村
同	鍋取村		(那賀)	中宮内村	
同	白田村		太田備中守領分	建久寺村	
同	同片瀬村		同	船田村	
同	奈良川村		本多平右衛門知行	伏倉村	
水野出羽守領分	大川村		太田備中守領分	同松田村	
(古料)	大川村		岩瀬加賀守領分	桜池代村	
(新料)	大川村		筑紫主水知行	吉輪村	
	大川村		同	明伏奈村	
	大川村		天野三郎兵衛知行	江南門野村	
合 計	菅引村	計 3 村	太田備中守領分		湯ヶ島村 山原村 力村
大 見 口	原保戸村		同		
大久保帶刀領分	地蔵堂村		同		
松平備後守領分	筏場村		合 計	26 (27) 村	
同	貴僧坊村				
三枝亀之助知行	姫ノ湯村				
鳥居五郎知行	戸倉野村				
天野三郎兵衛知行	カ 村				
柳生主膳正知行					
溝口辰蔵知行					
合 計					

料料 御私

第1表 天城御林山地付村増加表

山附四口	年代	元禄 11 年	安永 8 年	天保 5 年
仁科口		26カ村	27カ村	30カ村
河津口		17カ村	23カ村	24カ村
狩野口(湯ヶ島口)		3カ村	3カ村	47カ村
大見口		8カ村	8カ村	19カ村
合 計		54カ村	61カ村	120カ村

豆州遠嵩野山天城山御林内江組込之儀伺書

私御代官所豆州天城山御林統字遠嵩野山之儀、凡長三里程横式里余も有之候場広之野山ニ御座候処、右者同州賀茂郡大見郷并東浦村々御料・私領入会秣場統、東海岸通第一之高山ニ而麓附村々々者孰レも三四里を相隔居、秣刈者勿論、萱刈等立入候ものも無御座候得共年々春中最寄秣場刈跡生立方之為野焼仕候儀ニ付、右火先相移、年毎焼山ニ相成、更ニ立木生立不申、全不用之野山ニ有之候趣及承候間、私御用序及見候処、天城山御林ニ相統罷在、土垣同様ニ有之、萱生等宜土地ニ而、所々木種等者相見候処、年々焼山ニ相成候故、立木生立不申、麓入会秣場境通、冬春之内野火除刈切等いたし置候ハ、木種行渡、暫時立木出来仕候相違有之間敷候得共、数村入会候秣場統之儀ニ付、村持野山ニ而差置候而ハ、迎も野火除等行届不申候ニ付、天城御林統之儀ニも御座候間、同山御林江組込之積申渡、御林守共時々為見廻、野火除刈境焼等為仕、可成丈立木行渡候様為心附候ハ、往々天城御林同様立木出来、御国益ニも可相成与奉存、最寄秣場入会村々相糺候処、前書次第ニ而麓村々々者遠隔居候高山之儀故、秣刈者勿論萱刈等罷越候ものも無御座、全不用野山之儀ニ付、如何様被仰付候而も故障筋毛頭無御座候段一同申立候、然ル上者手代差出麓入会村々為立会、御境筋取極、天城山御林内江組込之積申渡候様可仕哉、依之鹿絵図相添奉伺候、以上

印割

弘化二巳年三月

御勘定所

江川太郎左衛門 印

御附紙

書面伺之通可被取計候

(切) 押 (弘化三年) 午十月

遠嵩(笠)山とは、伊豆東海岸伊東・熱川間に聳える山で、山附村々である賀茂郡内の天領八幡野・大川村と、私領赤沢・池・冷川・中野戸・萱引村地続大見口一六カ村、東浦三カ村合計一九カ村入会の秣場続きの原野である。この一九カ村の村々から御林山への編入方を勘定所へ願ひ出したので、幕府は代官に命じ、遠嵩山の利用度の調査を行った。その結果幕府は天城連山と類似の土性故、将来の成林を期待して御林山に編入したのである。

註

(2) 静岡県史料第一輯所収大川家文書

(天文一九年)
「自去戊戌歲豆州狩野山檜奉行依被仰付」

(3) 西伊豆町中奥田照藏氏文書「元禄一四年御林守沿革」

(4) 文化九年十二月「天城山炭焼出方之儀ニ付申上候書付」
(江川家文書)

(5) 宝曆九年「御用留」(江川家文書)

二 天城炭製炭の沿革

天城山での焼炭が往時より行われていたことは、天正九年(一五八一)十月大平百姓に宛てた北条康忠裁許状⁽⁶⁾にも一非公儀⁽⁷⁾而於他領之山、無体ニ炭焼木可ニ剪取ニ事、柿木百姓申所非分候と、狩野山での焼炭に触れている如く、すでに江戸時代以前から焼出されていた。

近世になってから一般にいわれている天城炭が、御用炭として年季請負製炭されるようになったのは何時頃であったか。明確な創始年代は不明であるが、伊豆国の代官所が、三島から韮山に移行された宝曆九年(一七五九)と見てよ

いであらう。

文政二年（一八一九）五月江川太郎左衛門より幕府御勘定所に差出した「天城山御林杉木之儀ニ付申上候書付」には請負人豆州那賀郡一色村文之右衛門炭焼出之儀、宝曆九卯々明和四子迄拾ヶ年季請負被仰付」と報告され、また安永二年（一七七三）の御用留中にも「十五ヶ年（宝曆八年）以来炭焼出被仰付」と記されている。このほか文化七年（一八一〇）に記述された「製炭沿革」は、

「製炭は宝曆九年より初る」としている点などその証左といえよう。

宝曆期に河津・仁科口の二口で請負製炭が開始された天城炭は、安永初頭にはすでに江戸に運ばれ、人々の注意をひくようになった。「嬉遊笑覧」に

安永二年巳二月頃新大橋際三俣埋立地できぬ。其頃伊豆天城山にて始めて炭を焼、同国仁科一色村文右衛門と云うもの、運上金を差出し、此事を営む、炭を上・中・下に別ちて売ル、下の分は粉碎けたるこな炭にて、蛤を焼に用しが、此時中州を埋め築く者ども工夫してこれを買、埋めしかば、はか行て成就すとて、江戸市民の多くの関心が天城炭によせられた事が推測できる。

しかし製炭の請負期間および条件を示すような具体例も判明せず、ただ宝曆九々明和四年迄拾ヶ年季で一色村文野右衛門が請負い、明和七々安永元年迄三ヶ年季で一色村請など、すこぶる断片的な史料しか確認しえない。ということは、年季も十ヶ年・三ヶ年と区々であり、幕府当局においても創始期の試みとして、種々な方法を用いたのではないかと想察される。そこで拙稿では、史料的な裏付けをもとにして、五ヶ年季製炭が四口において確定されたと思われる享和二年（一八〇二）以降の年季請負製炭期間を摘出し、その製炭仕方・生産量などを明らかにしたい。

以下伊豆垂山代官江川太郎左衛門家文書中「天城炭御用留」「天城山御用留」「御林山御用留」などを基本史料として考察を進めたが、江川文書は何時の時代かに編集者（整理者）によって綴じ直された跡があり、諸処に多くの錯帳がみられる。とくに冊子の表紙に年号が附してあっても、無年代史料などは、内容的に表示の年代とは全く無関係である場合が多く、出来得る限り考証しつつ是

正して取扱つたつもりである。

なお本文中特別に註記のない限り、引用史料はすべて江川家文書による。

註

(1) 静岡県史料第一輯所収 田方郡下狩野村大平 宮内太郎
家文書

(2) 安永二年三月「天城山々出物分二御尋ニ付書上 下」

(8) 西伊豆町寺川 奥田照藏家文書

(9) 明和八年の御用留中に「四ヶ年以前寅年々村請ニ罷成、寅(明和七年)々辰(安永元年)迄三ヶ年季請負、当巳(安永二年)年季明ニ付、跡請負吟味仕」とある。

三 年季請負製炭仕法

製炭請負年期と請負人の交替経緯

天城御林山における御用炭は、年季請負制度によって宝暦年間より河津・仁科口で始められたが、五カ年季によって、両口(川津・大見口と狩野・仁科口)各一請負人を撰定し、計画的な大量生産が実施される様になったのは、享和二年(一八〇二)からと思われる。

第2表はこの計画生産に入った享和二年十一月より、明治三年(一八七〇)十二月に個人の請負を廃止し、通商会社に引きついだ迄の約七〇年間を、遺存史料にもとづいて、請負期間および請負人名を列記して、請負の経過を表示したものである。

なお表中の左側算用数字は、後述の便宜上七〇年間を年季別に区分した度数字である。

第2表で明らか様な様に、請負期間は特別の事情のない限り中五カ年季を原則としている。請負人は特定の江戸の商人が請負う所謂町人請負制と、御林附の村々または林附村の特定の個人、或いは個人名義で請負って、さらに下請けによって製炭する場合など、請負形式は多様であった。請負人の採用(任免)は、当然幕府御勘定所であるが、請負の

第2表 天城御用度年季請負人一覽

河	津・大見口	狩	野・仁科口
(宝暦9年～明和4年) (寛政4年～享和2年6月)	(豆州那賀郡一色村文之右衛門請負 但し川津・仁科口) 久左衛門 (江戸三田菅丁目)	一色村文之右衛門 (寛政12年一色村藤七=交替) 享和2年11月～文化4年10月 一色村請 (豆州那賀郡)	
① 享和2年11月～文化4年10月 文化5"1"～文化9"12"	久左衛門 (") 久左衛門 (")	文化5"1"～文化9"12" 一色村請 (")	
② 文化10"6"～文政元"5"	久左衛門 (南大坂町演兵衛店)	文化10"6"～文政元"5" 三郎平 (江戸本八丁堀三丁目)	
③ 文政元"6"～文政6"9"	久左衛門 (")	文政元"6"～文政6"9" 三郎平 (江戸日本橋通三丁目) (文政6年10月～文政7年7月迄年季明) (運上金上納番=付三郎平年季之御取放無之)	
④ 文政6"10"～文政11"9"	久左衛門 (")	文政7"8"～文政12"7" 弥右衛門 (田方郡鵜ケ島村)	
⑤ 文政11"10"～天保4"9"	久左衛門 (江戸新橋)	文政12"8"～天保12"7" 弥右衛門 (")	
⑥ 文政4"10"～天保9"9"	久左衛門 (")	天保5"8"～天保10"7" 弥右衛門 (万兵衛天保9年10月より) (跡請負)	
⑦ (天保9年10月～天保10年7月年季明)	天保9年9月久左衛門・弥右衛門不正の取計致し候ニ付請負御取放被仰付		
以下炭焼出場所指定せず全口2人ニ面一手引請となる。			
⑧ (天保10年8月～弘化元年7月)	万兵衛 (本八丁堀菅丁目健兵衛父) (松屋町)	嘉右衛門 (三田菅丁目平兵衛店)	
⑨ 天保12年12月～天保13"11月	(天保12年12月嘉右衛門死ニ付) 万兵衛一人ニ而請負	嘉兵衛 (江戸南八丁堀)	
⑩ 弘化4"12"～嘉永5"11"	万兵衛 (弘化元年12月万兵衛死ニ付子健兵衛ニ代ル)	嘉兵衛 (江戸本船町)	
⑪ 嘉永5"12"～安政4"11"	健兵衛 (本八丁堀菅丁目)	新次郎 (江戸京橋御町)	
⑫ 安政4"12"～文久2"11"	松兵衛 (安政3年8月健兵衛死ニ付松兵衛ニ代ル)	新次郎 (江戸神田道有屋敷)	
⑬ 文久2"12"～慶応3"11"	安政5年12月より助五郎 (江戸東渡町忠次郎地蔵)	新次郎 (江戸本船町) 差加え、請負人三名となる。 新次郎 (明治元年3月新次郎死ニ付静太郎ニ代ル)	
⑭ 慶応4"6"～明治3"12"	松兵衛 (文久2年9月松兵衛死ニ付静太郎五郎ニ代ル)	嘉兵衛 (江戸本船町) (明治3年5月嘉兵衛死ニ付静太郎ニ代ル)	
⑮ 明治3"12"～明治6"8"	嘉兵衛 (江戸本船町) (明治3年5月嘉兵衛死ニ付静太郎ニ代ル)	明治3年12月天城炭請負差免トナル 通商会社請負	

方法は、原則として願出制である。本人の出願によって、幕府は代官所に対し、在地願人の所業の取調べを命じ、代官はさらに製炭請負人の直接の監督者である御林守の意見を徴して報告をする。要するに人撰については代官は單なる諮問に対する助言機関にすぎなかった。

以下請負人撰定経過の事例を、文化九年（一八二二）一二月（表中の第②期）請負年季明以後の諸記録によつてたどつてみることにする。大見・河津口の先請負人江戸南大坂町久左衛門は継年季を出願したが、一方の狩野・仁科口の請負人たる一色村村請惣代嘉左衛門は跡請負を願ひ出さず、この情報により久左衛門は両手を一人で請負つて焼出した旨願を提出したが

（文化九年）

天城山炭焼出方請負人南大坂町久左衛門并豆州一色村両請負共、申年十二月年季明ニ候之處、一色村請之方ハ、惣代嘉左衛門跡請負不相願、是迄之炭売場又八井同州湯ヶ嶋村名主弥右衛門外屯人、右跡請之儀、来酉（文化一〇）ハ丑（文化一四）迄五ヶ年季請負之儀相願、且久左衛門申立者、一色村之儀者跡請不相願候ニ付、此度一ト手ニ焼立相願候処、前書之通又八外式人跡請相願、右之願人も有之候間、何レ方え請負可申渡哉未治定不致候得共……

と、ほか数人による競願者がある旨を勘定奉行柳生主膳より、江川代官に申渡されている。こゝでいう競願者とは、一組は豆州田方郡湯ヶ島村名主弥右衛門と百姓三郎左衛門の両名、豆州君沢郡土肥村百姓仁兵衛、さらに江戸本八丁堀三丁目家主三郎平の都合三組である。これに対し幕府では、江川代官宛に、

豆州田方郡

湯ヶ島村

名主 弥右衛門

百姓 三郎左衛門

右之者共、本八町堀三町目家持又八（炭売場）を相士にいたし、此度天城炭焼出方請負願出候処、右跡請負申付候而も可然者ニ候哉、身元并所業等相糺可申聞候

但 請負被仰候ハ、証拠地之義者、右弥右衛門・三郎左衛門所持之田畑合三町分可差出旨申立候、右者同人所持ニ相違も無之哉、質地直段等凡ニも取調可被申聞事

と、請負願人の「各人之所業様子相糺可被申聞」と諮問している。なおこの時ほかの出願者土肥村仁兵衛は同人の所持之田畑を、江戸本八丁堀三郎平は君沢郡河内村百姓権兵衛を証人に相立て、権兵衛所持之田畑を証拠地として差出すべき事を願書に附記している。先請負人久左衛門は金百両を証拠金として提出している。右の出願者に対する身元調査（但し在地出願者のみ）を、代官が御林守の具申によって報告した結果、幕府は結局大見・河津口を継年季として久左衛門に、他の一手の狩野・仁科口を三郎平に請け負わす旨申し渡している。

ここで第2表を一覧すれば判明する如く、先請負人が両手とも継年季の時は焼出期間がすぐ継続するが、跡請負人が新人の場合は、身元調査などのため日時を要し焼出期間に空白が出来る。この第②期も文化九年一二月の年季明より六カ月間のブランクを経て、翌一〇年六月に第③期の製炭が開始されたのである。またこの第③期ではじめて両手が江戸の商人によって製炭されるというケースが出現した。

以上の様な経過によって第③期の狩野・仁科口は江戸商人の新人三郎平が請け負う事になったが、三郎平はこれ以後第④期すなわち文政六年九月まで一〇年間製炭請負人をつとめたが、「運上金百三両上納滞」につき、継年季の御沙汰は取り止めになり、このため地元の湯ヶ島村名主弥右衛門（第③期には三郎平と競願）が文政七年（一八二四）八月より引き請けることになる。その後は先請負人の久左衛門と弥右衛門両者の請負が続くのであるが、天保九年（一八三八）九月両名が「不正之取計いたし候儀ニ付御取放」となる。そして幕府は直ちに跡請負人を公募したが、

天城炭請負人之儀ニ付申上候書付

天城山炭焼出請負人南大坂町久左衛門・豆州湯ヶ嶋村弥右衛門儀、不正之取計いたし候ニ付、請負御取放被仰付候付、弥右衛門売場引請居候松屋町万兵衛当分之内請負被仰付候処、久左衛門跡請負望之もの有之候ハ、可申上旨、先達而御達御座候処、右請負申付可然見込候もの、私支配所ニ差当り見当不申候、依之此段申上候、以上

(天保一〇年)

亥五月四日

江川太郎左衛門

御勘定所

と言上している如く、大見・河津口は久左衛門が「御取放」になった天保九年九月より八カ月経た翌一〇年五月になつても、在地では「跡請負望之もの無之」で決定せず、結局天保一〇年（一八三九）八月に、江戸商人三田壱丁目平兵衛店嘉右衛門と、さきに御取放になった湯ヶ嶋村弥右衛門炭売場（江戸）本八丁堀壱丁目家持儀兵衛父万兵衛の両名が請負人に決定した。今度は大見・河津・狩野・仁科四口の両手を一ト手にして両名が引請けることになった。ところが五カ年季の年限を完了しない天保一二年一〇月に、嘉右衛門が

万兵衛儀身元も宜、山方仕入金諸払向聊差支之義無之、嘉右衛門儀者身元浮薄之趣ニ相聞、仕入金諸払向差支候付、自然炭焼出方抄取不申、既嘉右衛門山方下請水野出羽守領分豆州大川村名主常右衛門・大久保勘太郎知行同州中原戸村名主源左衛門立替仕入金五百両余ニ相成、其上貸金も三百両余有之、炭代為替金茂三拾両差滞申候

と江川代官所より幕府御勘定所御普請役に訴えられている。幸か不幸かこの事件は、同年十二月嘉右衛門病死により年季半ばにして請負は打切られて落着いている。そして天保一三年一月まで、また万兵衛一人にて一ト手引請けの型で製炭が続行された。

ところで今までは、請負人の積極的な出願によって、幕府が製炭を許可し、請負人自らの契約不履行により御取放になり請負人が交代して来た事例である。がしかし製炭が年を重ねる次第に炭木の原木が不足し、段々と深山に焼竈を仕立てなくてはならない状態になる。この事は製炭費および運送賃の増加になり、自然と多量の失費を招くため、請負を折角許可されながら、その年季中途にして御免除を願ひ出るものが出て来た。すなわち安政五年（一八五八）三月に、第⑫期（安政四年二月―文久二年一月）を請負った江戸商人松兵衛・新次郎両人は、つぎの様な歎願書を江川代官所宛に提出している。

乍恐以書付奉願候

一天城炭御受負人新次郎・松兵衛奉申上候、私共儀、是迄御請負御用無滞奉相勤、冥加至極難有仕合ニ奉存候、然ル処近来御林手薄ニ相成、追々深山江竈立仕候義ニ付、諸失費多分相掛候ニ付、山方下請負之者共江仕入金用達遣し、焼出し・津出篤難立候ハ、御請負高俵数無滞出来可申候得共、私共儀近来身上向不如意ニ相成、仕入金用達遣し候義自力ニ難及、必至尋当惑仕候ニ付、東湊町忠次郎地借助五郎方江及示談、私共跡御受負之義、同人江被仰付被下置度、先船御奉行所様願書江差出し申候処、追而御沙汰も可被下置旨被仰渡、難有仕合奉存候処、去ル二月十日夜日本橋辺江出火ニ而天城炭売場・置場共類焼仕、御用御困炭等不残焼失仕、甚当惑難決仕候間、奉恐入候御義ニ御座候得共、御上納炭御猶予御願申上候処、其後少々宛入津仕候ニ付、尚亦御用炭無恙相納罷在候得共、前書奉申上候通、追々入津無数ニ罷成、万々一御用御差支ニ相成候而ハ深奉恐入候御義ニ御座候間、何卒格別之以御慈悲、跡御受負之儀、助五郎江急速御下知被仰渡、私共義ハ首尾能御免被仰付被下置候、偏ニ奉願上候、以上

安政五年三月九日

御勘定所
御掛様

天城炭請負人 松兵衛
新次郎

右の歎願書は再願であるが、この新次郎・松兵衛兩人が提出した東湊町助五郎への名義変更願書は、代官所より勘定所に取つがれたが却下された。しかし、結果的には右兩名のほか新たに助五郎を差し加え、三人で請負を仰付けられて、文久二年一月までの請負任期は終了した。

以上の様に多種多様なケースを経て、明治三年（一八七〇）十二月に個人名義的の請負いは中止となつて通商会社の東京商社に引継がれた。

ここで一つの疑問は請負人に指名された数人の江戸商人である。彼らは江戸薪炭問屋組合である川辺竹木炭薪問屋の問屋中に、また十五組の炭仲買人にも、その名前が見えない。

これら江戸商人は、請負に関する諸願・届書に殆んど屋号を附けず、したがって調査の手掛りがない。例外として、江戸日本橋通三丁目と泉屋三郎平としてゐるのが一通あるのみである。これによつて三郎平は和泉屋を名乗っていた事が判明するが、その他は、永年御用炭を請負った久左衛門が、天保三年（一八三二）御用炭江戸運送方についての「御用炭掛合内済証文」の中で「当国天城山御用炭焼出之義者、江戸新橋駿河屋久左衛門、去ル丑より来ル巳九月迄請負」とあるにより、おそらく駿河屋を名乗っていたと考えられる。また第⑨期の請負人である嘉兵衛は、弘化二年（一八四五）に御用炭が難破した時の浦手形に「御用炭御請負方江戸南八丁堀小出屋嘉兵衛殿」とあるので、これも小出屋と称していたと思われる。何れも一通のみの証文で推量するしか方法がない。

これに加うるに住居の変更である。前掲の久左衛門も享和二年には三田壱町目であつたものが、文化一〇年には南大坂町源兵衛店天保三年には江戸新橋と書かれている。さきの三郎平も文化一〇年の時は江戸本八丁堀三丁目家主三郎平とあるのが、文化一四年に前記の如く江戸日本橋通三丁目と記載されている。嘉兵衛も天保一三年の御請書に江戸南八丁堀が、嘉永二年の申渡には本船町となつてゐる。さらに次の請負人である新次郎・松兵衛兩名に例をとつてみても、新次郎はじめ「神田道有屋敷林兵衛地借罷在候処、今般勝手ニ付、山城町辰蔵支配江地借仕候」と安政六年に届出ている。一方の松兵衛にいたつては、安政五年には本八丁堀壱丁目普

右衛門地借、同七年正月に小網町式丁目平兵衛宅に、文久三年八月五郎兵衛町家主六兵衛地借に転出した。その翌九月には、宇田川町家主新兵衛支配へ地借という様に転々と居所を移動している。この様に住所不定と屋号不詳のため、管見の限りでは、容易に他の業種の諸問屋中にも、名前を見出せない状態である。

請負商人の出自不詳は、後述の製炭の経営の解明にも関聯するところであるが、一種の資本（証拠金百両が納入可能相当）によって、御用商人の特権を取得して経営する小売商であったか。そしてどの様な業種を経営する人物であるか。その実態が未だに解明出来ず、この事は今後の大きな課題として残されるものである。

請負条件

幕府が御用炭の生産を管理するには、まず第一に請負人に対して種々の条件を規定して誓約させることであつた。天城御用炭製炭も、請負許可に際して厳重に条件を申渡し、誓約書を提出させている。

つぎに掲出する史料は、享和二年（一八〇二）十一月より文化四年（一八〇七）一〇月に至る中五ケ年間（第2表①）の請負を許可した時の条件、および請負誓約書とその後の手続を示すものである。内容的に重複箇所もあって冗長すぎるが、請負経緯と仕法を克明に察知しうる史料と考えるので、長文ながら敢えて全文を掲げることにする。

- (1) 請負人決定について請負人御請証文
- (2) 幕府御勘定所宛請負人製炭御請書
- (3) 代官より幕府御勘定所宛焼出取計方伺書

(1)(2)と内容の重複箇所は省略す

このほか御林地付村々が、製炭請負人決定についての御請書⁽¹³⁾を幕府勘定所宛差し出し、都合四通をもって公的な五カ年季製炭手続が完了する。

- (1) 差上申一札之事

豆州天城山御林雜木伐出炭焼出之儀、当六月中年季明ニ付、猶又繼年季之儀奉願候処、御吟味之上、左之通被仰渡候

(寛政四年)

一御林内狩野口外老ケ所炭焼出之儀、去ル子年々追々五ヶ年季一色村文之右衛門御請負仕候処、同人病氣ニ付、去々申年同村藤七儀讓請、是迄御請負仕罷在、当六月迄ニ而年季明之処、右炭焼出御座候得共、焼方人足其外稼之者共都而村方助成ニ相成候ニ付、此度一同相談之上、猶又五ヶ年季一色村惣請ニ而御請負之義、同村安右衛門外式人一同奉願上候処、御吟味之上、老ケ年上炭三万俵宛当戊十一月々来ル卯十月迄、中五ヶ年之間焼出願之通被仰付候

一同御林大見口外老ケ所炭焼出之儀、去ル子年々追々五ヶ年季三田老ケ目久左衛門御請負仕罷在候処、当六月迄ニ而年季明ニ付、猶又引続五ヶ年季請負之儀奉願候処、御吟味之上、老ケ年上炭五万五千俵宛、当戊十一月々来ル卯十月迄、中五ヶ年之間炭焼出之儀願之通被仰付候

一私共儀、銘々願之通御請負被仰付候ニ付、右申上候俵数年々焼立仕、是迄之通売捌直段金老ケ両ニ付、六貫目入式拾老ケ替之積りを以、問屋・仲間売等江者売渡不申、素人江直売仕、運上金之儀も、炭老ケ万俵ニ付、金三拾八兩宛之割合を以焼出高に応し、年々十一月限り上納仕、御林伐透之跡江為冥加、一色村請之方者老ケ年櫓・櫛苗木三千本つ、文之右衛門者杉苗木老ケ年三千本宛植付可申候、其外御吟味中申上候趣并是迄差上置御請証文之通相心得、猶又銘々御請証文早々相認差上可申候、尤炭焼場所等ハ、御普請役中并御代官江川太郎左衛門御手代中之内御附切ニ付、御差函請、取計可申旨被仰渡候

(本九・西九)

一御風呂屋江御用炭之儀者、私共申合老ケ月限持切、隔月納仕、尤御風呂屋口迄持込、諸入用共一式撰炭正味六貫目入金老ケ両ニ付、拾八俵六分替ニ而仕来之通相心得、御差支無之様可仕旨申上候処、是迄願之通被仰付候

一御請負中為証拠、一色村請負之分者、是迄文之右衛門差上置候質地之内、三嶋宿相除、一色村分同人所持之田畑只今迄之通差上置、久左衛門儀者、是迄之敷金百両其儘差上置可申候、然上者万一御請負向之儀ニ付、不埒之筋茂御座候ハ、証拠地并敷金御取上可被仰付候、其節御願之間敷儀可申上様無御座候
右之通急度相心得、猥之儀無之様可仕冒被仰、承一承知奉畏候、依而御請証文差上申所、如件

享和二戌年十月十八日

岩瀬加賀守知行

豆州那賀郡一色村

名主武右衛門煩ニ付

代兼 組頭 安右衛門 ㊦

百姓代 嘉右衛門

元請負人 藤 七

三田彦丁目 久左衛門 ㊦

御奉行所

前書被仰渡之趣、私共儀も罷出奉承知候、依之奥書印形差上申候、以上

右一色村 百姓代 清 吉

三田彦丁目 五人組 金 三 郎

名主小兵衛煩ニ付

代 裕 藏

一〇九

一是迄久左衛門請負場所大見口・河津口之儀数年相稼候ニ付、御林内御手薄ニ相成候間、是迄藤七御請負場所ニ而此度一色村惣請ニ可罷成、狩野口之方ニ峠を越式分通久左衛門方ニ取越之積、願之通被仰付候ニ付、双方立会境目御改を請、御引渡被下候上者、決而爭論ケ間敷義不仕候様、精々被仰渡承知仕候

一津出之儀者、先達而御吟味之節申上候通仕候、尤一色村請負之方狩野口之内字長野入ニ而焼立候分計り久左衛門御請負、津出場之内伊東浦ニ附出度段奉願候処、久左衛門儀茂御糺之上、差支之儀茂無御座候ニ付、願之通一色村ニ被仰付候間、双方共勘弁仕、駄賃稼之者共糶雇等之儀無之様、其節々駄敷之割合非分之儀無之様仕、且人足共入交り候連、決而異論ケ間敷義無之様可仕旨被仰聞承知仕候

一御林内ニ居小屋等相立、詰合候内火之元大切ニ仕、都而何事ニよらず御差図を請取計候様、私共下代并炭焼人足・小働之もの、又者日雇之もの迄御法度之儀者不及申、猥成義為仕間敷候、且近村ニ入込喧嘩・口論・諸勝負等之義決而不仕、諸事正路ニ守、御取締り第一ニ心付、物騒敷茂無之様可仕事

一御林附之人足相雇候ハ、相当之賃錢相払、諸色之義者所相場并相對直段を以代錢無滞相渡、惣而非分成義無之様御林附村々ニ私共手代ニ至迄、少茂異論出入ケ間敷儀等無之様可仕事

一御用向之儀ニ付、御旅宿ニ罷出候節者、村役人取次を以可申上候、無断罷出候義致間敷段、被仰聞承知仕候

一右御用ニ付村々御止宿之節者、木錢并米代者所相場を以御払被成候間、請取印形仕、右御払之内ニ而相賄、所有合之野菜を以一汁一菜之外御馳走ケ間敷儀、其外酒肴・菓子等決而不出出、賄入用等少茂相懸不申、勿論聊之品たりとも音信・贈答賄路ケ間敷義不仕、且御逗留中御調物等之節者、村役人之内為立会、代物御払被成候節、其時々請取書差出可申候、御召仕中ニ至迄、聊之儀ニ而御非分成義有之候ハ、不隱置、早速可申上候、万一心得違右駄之儀隠し置候ハ、却而可為越度旨、精々嚴敷被仰聞承知仕候

一御旅宿ニ而村役人者勿論、人足駄ニ而茂御宿之勝手ニ大勢集リ、食事等致候義仕間敷旨被仰聞承知仕候
右被仰渡候趣込々承知得心仕、猥成義無之様相守、下代并炭焼人足・日雇等之者迄も嚴重可申付候、若相背候者有
之候ハ、私共越度可被仰付候、惣而御願ケ間敷義申上間敷候、依之御請証文差上申所、仍如件

岩瀬加賀守知行

豆州那賀郡一色村

享和二年戊十一月

名主 武右衛門 ㊦

与頭 安右衛門 ㊦

百姓代 嘉右衛門 ㊦

江戸三田老町目

家主 久左衛門 ㊦

御勘定所

(3) (前書略) (江川代官々御勘定所宛差出)

一 (前文略) 場所之義ハ御普請役私手代立会分割渡、仁科口之義者、数年伐出候間、已来炭竈六竈を限、狩野口・大見口之方ニ而重ニ焼出、河津口之義茂数年焼出候ニ付、已来白田・片瀬・梨本三ヶ所ニ而三拾竈を限り為相立、不生茂場所者焼方不為致、場所限竈帳請負人より為差出、月々焼高相改、船積会所ニおゐて俵毎六貫目入之積り相改、俵直し出来御普請役極印打候上、為致船積、請負人送状ニ場所詰手代致割印、江戸着船之節者、私江戸役所え為相届、其時々手代差出、送状引合水揚見届置、月々着船高御届申上、年季中老ヶ年焼高并潰炭江戸着船高仕訳、運上金とも其年々十一月中御届申上候様可仕奉存候

(四ヶ条略)

一炭焼稼人共之儀、御料・私領・分郷他国より入候儀ニ付、取締之儀厳敷申付置、万一不埒之義有之敷、又者木伐質・炭焼質等請負人より受取過致し、稼方不情ニ而、外稼人とも之仕癖ニ拘り候義者、私領村方之ものニ而も領主地頭ニ不及懸合、場所詰手代致吟味、利解申付、其上不相用不束ニ候ハ、其領主・地頭名前相伺候上ニ而取計候様可仕奉存候

一右炭致船積出帆後、難破船等有之段訴出候節者、伊豆国海辺者勿論、相州根府川御関所西之分者、私手代差遣、難破船之始末吟味仕申上候様可仕奉存候、万一右之外余国ニ漂着之節者、其所之役人より差出候浦証文之趣を以申上候様可仕奉存候

一右炭運上金之儀者、江戸着船炭高ニ応、月限ニ取立、金高百両ニ相成候ハ、其時々御金蔵より上納仕、其年々運上金其年々十一月迄ニ皆納、御金蔵納茂年々皆納相成候様可仕奉存候

但 難破船流失炭之分者、運上金半減積取立候積相心得罷在候

一炭焼為取締附置候手代手廻り兼候節ハ、場所詰手代差遣候儀茂御座候間、是迄之通取計都而右御用中廻村仕候節者、私領村々ニ而繼立候人馬賃錢相払候様可仕奉存候

(一ヶ条略)

右之通奉伺候、洩候儀者追々可奉伺候、以上

享和二戌年十一月

御勘定所

右の請負条件の中ではっきり明記されているのは、①証換金の指出 ②運上金上納 ③冥加植栽 ④本丸・西丸両

丸御風呂屋御用炭の納入などの諸義務を遂行したうで、一色村は年間三万俵を、久左衛門は五万五千俵を焼炭しなくてはならないことである。このほか焼炭するための種々の条件、例えば炭木・炭竈数の制限をはじめ焼出に関する服務規則が定められて誓約させられている。以下個々の条件について触れてみることにする。

①証拠金（敷金）

製炭を請負う際、必要条件の一つとして要求されたのは、資金面の裏付けである。炭木は御林山内の雑木を下げ渡されるので無償であるが、その伐採をはじめとする製炭費および江戸迄送り届ける一切の荷造運賃を含めた所謂生産費、さらに運上金上納、冥加植栽のための苗賃・苗植賃など相当な金額の投資を必要とする。この資金を工面しうる資本の所有者、すなわち担保を幕府は要求したのである。第①期では前掲の如く一色村は文之右衛門所持之田畑を、久左衛門は敷金百両を指し出している。この様に村請又は現地の請負人の時は、大方向地所持の田畑を担保物件として質地に入れ、江戸商人は現金を敷金として納入しているのが通例である。がしかし第③期の文化一〇年六月に請負った製炭者は、その御請書の中で

一右御請負中為証拠、久左衛門儀者、是迄之通敷金百両其儘差上置可申候、三郎平儀者、豆州河内村百姓権兵衛証人ニ相立、同人所持之田畑合反別四町四反三畝十八歩之分差上置可申候

と久左衛門は、今迄通り現金を敷金として提出しているが、相手方の三郎平は、同じ江戸商人ではあるが、保証人として在地の百姓権兵衛を立てて、同人所持の田畑合反別四町四反三畝十八歩を質地として差し上げている。

また他の例としては文政六年（一八二三『第⑤期』）に先請負人三郎平の跡をついだ豆州田方郡湯ヶ島村弥右衛門は証人として江戸南本所扇橋豊五郎を立て、証拠物として証人豊五郎が所持している「本所扇橋代地町家屋鋪式ヶ所、此沽券金一四〇両之地所差置」など、今度は前例と反対に、在地の百姓が江戸商人を証人にして、その家屋鋪を担保に

入れるなど、全く逆のケースも存在する。何れにしても指置いた担保または証拠金は、納入した以上、万一不正があった場合は、没収されることを誓約している。

② 運上金の上納

天城炭焼出に当って一定の運上金を納入しなくてはならないことは、前出の引用史料によっても明らかである。そして運上金は焼炭高でなく、すべて江戸着船炭高にかけられ、その割合は年代および請負人により一定していない。たとえば第①期の場合は、久左衛門・一色村請両手ともに同率で

炭焼出御運上之儀、壹万俵ニ付金三拾八両之積を以上納仕

と御請書中に、壹万俵ニ付金三拾八両の割で上納する事を誓約している。しかしこの時の請負条件では、上炭・粉炭の区別が明記されていないが、実際の納入書によると

覚

久左衛門請

戌(享和二年)十一月より 五ヶ年分
卯(文化四年)十月迄

一 上炭拾九万四千百九拾九俵
一 粉炭三万五千四百四拾貳俵

外 上炭三千三百六俵
粉炭八拾五俵

一金七百六拾壹兩三分 永貳百三拾五文貳分

内 金六兩壹分 永六拾五文四分

着 船 高

焼 炭 高

右 運 上 高

右 運 上 半 減 之 分

一色村請

同 右 断

一 上炭拾壹万三千九百六拾三俵
粉炭壹万九千三百拾三俵

着 船 高

外 上炭百七拾九俵
粉炭八拾壹俵

焼失炭之分

一金四百四拾八兩三分 永百三拾七文壹分

右 運 上 高

内 金 壹 分 永百貳拾貳文五分

右 運 上 半 減 之 分

合 金 千 貳 百 拾 兩 三 分 永 百 貳 拾 貳 文 三 分

内 金 六 兩 貳 分 永 百 八 拾 七 文 九 分

焼失炭運上半減之分

明確に上炭・粉炭を区別し、運上金割高も上炭三拾八兩・粉炭八兩の割合で上納されている。すでにこの時から両方を区分して徴収していた事が判明する。

第③期の文化一〇年（一八一三）になると、今迄の両手ともに三拾八兩の規定が、請負人によって差違があり、且運上額も増加している。

久左衛門者炭壹万俵ニ付金四拾五兩宛、三郎平儀者炭壹万俵ニ付四拾八兩宛、尤粉炭之儀者壹万俵付金八兩宛之割合を以、焼高出ニ応シ年々十一月限上納仕

請負人が同じ江戸商人でありながら、久左衛門は四拾五兩、三郎平は四拾八兩と差がつけられて請負を許可されているが、理由は詳らかでない。以後天保三年（一八三二）迄この割合で引継がれるが、天保三年より拾力年間は四拾八兩のうち拾八兩が免除され、上炭三拾兩・粉炭八兩の割で納入している。これは幕府が先請負人三郎平の運上金不納分を上納する条件で、跡請負を引付けさせた臨時の特別処置として拾八兩を免除したと考えられる。しかし免除期間中すなわち天保一〇年（一八三九）一〇月には「運上金不納之分上納御免被仰付」ているが、にも拘わらず運上金割高は三拾兩と減額されたままとなり、請負誓約書には依然として四拾八兩と記しながら、その都度「内拾八兩是迄通御

請負中御免除被成下」と添書している。この状態で結果的には請負の最終年期の明治三年（一八七〇）まで、継続して三拾両に引き下げられて上納している。これは要するに濫伐による炭木の不足のため、奥地製炭をしなくてはならない難渋さも加わって、跡請負人に望むものがなくなったために、幕府のとった一つの緩和策とみてよいであろうか。

なお江戸に廻送される時、難破船による濡水・流失炭および炭置場などの火災事故による焼失炭は、その都度願書を幕府に提出し、証明のある分に対しては運上半減となった。

このほか、運上金は請負人の一カ年の請負高（正確には江戸着船炭高）に対してかけられるものであって、もし請負人が五カ年の請負高を越えて製炭した分は無運上となる。製炭請負高は五カ年季毎に定められているが、享和二年には久左衛門は一カ年五万五千俵、一色村請は三万俵であったのが、後年には両手で拾万俵となる。この請負高を上廻る製炭がどの程度可能であったか。いまのところ実数は不明であるが、嘉永五年（一八五二）には

子十二月、中五ヶ年季之内（嘉永五、安政四年）
巳十一月迄

一上炭四拾四万八千八百拾四俵

此運上金千三百四拾六両壹分 永百九拾貳文

外上炭四万八千五百貳拾五俵

壹ヶ年拾万俵余之分

万延元年三月

御勘定所

但壹万俵ニ付金三拾両

無運上之積

江川太郎左衛門

とあって、請負高を製炭するのが精一杯で、それ以上の製炭は約一割内外ではなかったかと推測される。⁽¹⁶⁾
つぎに運上金はすべて現物納でなく金納であった。⁽¹⁷⁾「金高百両ニ相成候ハ、其時々御金蔵より上納仕、其年々運上

金其年々十一月迄ニ皆納、御金藏納茂年々皆納相成候」と前掲史料にある様に、百兩に達するとその都度上納して、年内には運上金が皆納するように命じている。しかし實際にどう扱っていたかは疑問であるが、一カ年づつ金子を納入し、決算していることはつぎの史料で明らかである。

請取申金子之事

金百五拾四兩 永貳百三拾貳文七歩也

銀座也
常是也

但 壹分銀

此銀拾六匁八歩

但 七拾貳匁三歩替

(安政四年)

(文久三年)

右者豆州天城山御林々焼出炭請負人新次郎・松兵衛一手請、去ル已十二月々来ル戊十一月迄中五ヶ年季之内、去ル已十二月々去々午十一月迄壹ヶ年分運上金上納、仍如件

成瀬為三郎 印

加藤次三郎 印

所谷左市郎 印

小嶋利太夫 印

今井一郎左衛門 印

星野一郎兵衛 印

安政七年正月廿六日

江川太郎左衛門殿

運上金はこの様に金子で上納されたが、名称は最終請負期には当然乍ら「税金」という名目で取立てられた。明治三年十二月東京通商会社に引継がれた時の税金はつぎの様に取極められている。

幕府御林山における林業生産(浅井)

差上申一札之事

一上炭拾万俵ニ付 此税金六百兩

一粉炭同 断ニ付 此税金百六拾兩

但 是迄焼出有之候炭凡壹万五千俵余之分者半税上納可仕候

右者豆州天城山焼出炭売捌方今般通商会社ニ而引請、手広ニ売買仕度、依而者同社肝煎牧山源兵衛義者事馴居候間、都而同人取扱、且税金之義者、書面割合を以会社々当御県庁江上納仕度旨奉願候処、御取調之上、願之通被仰付候間、税金納方等閑無之様可仕旨被仰渡承知奉畏候、仍御請証文差上申処、如件

明治三庚午年十二月十七日

東京通商会社

肝煎 牧山 源兵衛 印

頭取 上野四良左衛門

菰山県

御役所

名代 久保田武兵衛 印

右の御請証文で注目される事は、上炭に対して粉炭の税率が高いことである。江戸時代には上炭四拾八兩に対して粉炭は八兩、明治の税金になってからは、上炭六百兩に対して粉炭は百六拾兩という約四分の一で、やや重い税率になっている。しかし実際の上納額は幕末に上炭が三拾兩に減額しているのではほぼ同率である。

なお請負条件中に、しばしば登場する粉炭について言及すると、粉炭とは文字に表現されている如く上炭にならない粉のくず炭であるが、ここであるという粉炭は、運搬途上および俵拵の作業中に生じたものでなく、製炭過程において粉になったものをいう。幕府より粉炭立方について江川代官に下問した返答書には、左の様に説明している。

粉炭之儀、於山元雜木焼立、炭竈^カ指^シ出シ口焚と唱候土砂交リ之灰炭を掛ケ、消上、炭撰出、随而自然極末之粉炭凡上炭之老割五分程相残り、上粉炭とも、於竈、元俵抜貫目掛改、粉炭者俵小口松ニ下或者二ノ字之印分いたし、山下ヶ濱着之上減貫俵者足シ炭船積仕、運上金之儀も、上炭壹万俵ニ付金三拾兩、粉炭同断金八兩宛積、毎月上・粉炭共船積出帆高者其翌月取調、太郎左衛門^(五)御届申上候儀ニ御座候
おそらく、この粉炭は加工炭に使用されたと思われる。しかし前掲の「嬉遊笑覧」に天城炭を粉砕けたるこな炭にて、蛤を焼に用しが此時中州を埋め築く者ども工夫してこれを買、埋めしかばはか行て成就す
とある様に、或は粉炭がこの様な用途にも用いられたかも知れない。

③ 冥加植栽

製炭請負人の義務の第三は冥加植栽である。冥加の植栽とは、林産物の払下げを受けた時、代償となるべき苗木を植栽し、その後補植手入を施行して成林せしめることを義務づけられたものをいう。天城山でも炭木の払下げをうけた製炭請負人が、炭材の伐採跡地に定められた樹種の苗木を、一定本数冥加として植栽することを命令された。この天城山での冥加植栽制度は、年季請負焼炭がはじめられた宝暦頃より行われた。すなわち

一 天城山炭焼出付、雜木伏透跡江前々々炭御請負人江杉苗木植附被仰付候、苗木之儀者、五六拾ヶ年以前（宝暦）
明和 仁科口一色村文之右衛門炭請負被仰付候頃^カ植付候趣

と述べている如く、宝暦当初はもっぱら杉の苗木を植栽した。享和以降になると、植付木数は一ヶ年一手三千本づつがほぼ固定化するが、苗木の樹種も杉・檜・桐・榎・赤松など種々である。この様に炭材にならない樹種である杉・檜・赤松の苗木の植栽を命じているのは、明らかに幕府が御林山に対する植林政策の一環であって、炭木の伐採跡地に、必ず炭木の苗木を植栽するという事ではなかった。

第3表 冥加植栽実績表 (享和3~文化4)

樹種 木数	久左衛門	一色村請	
	杉	檜	桐
植付木数	15,000本	10,550本	4,450本
内成木数	12,566	9,270	3,160
不根付植増分	2,434	1,280	1,290
総植付木数	17,434	11,830	5,740
活着率	84%	88%	70%

第4表 冥加植栽実績表 (文政7~9年)

樹種 木数	杉	赤松	檜
	杉	赤松	檜
植付木数	17,390本	2,700本	1,430本
内成木数	11,516	1,262	1,153
不根付植増分	5,874	1,438	277
総植付木数	23,264	4,138	1,707
活着率	66.2%	46.7%	80%

なお冥加植栽は年季請負条件のほかに別冥加として苗木の植栽をする事例もある。後述(炭木の制限の項参照)に示す如く、文化一四年幕府が檜木の炭木焼出を禁止したため、製炭請負人は「炭証合相劣ニ付、檜木節・曲・悪木の分」の炭木焼き立を願ひ出て、その代りに別冥加として赤松・檜など「上木之木品」の苗木を植付をしたなどがそれである。

第3表は第①期の五ヶ年間に製炭した久左衛門および一色村の冥加植栽実績を表示したものである。久左衛門は五ヶ年間で一万五千本の杉苗木を植え、そのうち活着しなかった苗木が二、四三四本もある。それをまた植え増して、結局成木一万五千本になるには、一万七千四百三拾四本の苗木を植栽しなくては義務が遂行できないのである。同様に一色村は、檜・桐苗木一万五千本の植栽を命ぜられたが、実際に植栽した苗木数は両種合わせて一万七千五百七拾本となっている。活着率はこの事例では八四%・八八%・七〇%という高率を示している。ちなみに文政七~九年の冥加植栽のデータを示す第4表に掲げる。杉が六六%・赤松が四七%・檜八〇%という活着率である。一般的に天城山は樹木の成育のよい地味で

ある。以上のうち高率の杉・檜は、苗木が現地調達が可能なたため成育がよいが、苗木不足の為に他所から苗木を取寄せて植える場合には根付率は低下する。五〇％以下という活着率を示した赤松は、苗木を甲州山梨郡の百姓持山より買い入れ、一カ年畑に床植えした後に山出しをしている。低率はその結果と考えられる。その時の届書を掲出する。

天城山炭木伐透跡に植付苗木之儀ニ付御届書

覚

文政七申八月
丑七月迄 中五年之内

初年当酉年分（文政八年）

一 赤松苗木千五百本

是者狩野口御林内字桐山江請負人弥右衛門、当秋中植付候分

右者豆州天城山御林運上炭木伐透跡江赤松苗木壹ヶ年千五百本つ、可植付旨、去申八月中被仰渡候処、右赤松苗木豆州ニ者払底ニ付、甲州ニ取寄候処、精氣も相劣候間、其儘植付候而者根付無心元、自分持畑江床植致置、当秋中書面之通、請負人弥右衛門植付候付、右場所詰手代見分爲仕候処、相違無御座候、依之御届申上候、以上

(印) 割
(文政八年)
西十二月

御勘定所

江川太郎左衛門 印

右の届書中にも記されているが、植付時期は、主として春秋二季に行われる。植付が完了したのちに場所詰手代が見分し、それから江川代官所より幕府勘定所宛植付届が提出される。この手続が終了すれば、以後は御林守の監督によって枯損木に対する補植・根付本数などを克明に報告するが、成育すれば「御林成木届書」を御勘定所宛に代官が提出する。幕府はこの間植付時期・植栽樹種の撰定のため、種々代官を通して御林守に下問し、その返答書によって

植林を勵行している。つぎの文言はその一例を示す証左といえよう。

天城山御林内苗木植付候植匂之儀ニ付申上候書付

天城山御林内炭木伐取跡地苗木植付植匂見込之儀、可申上旨被仰渡候付相糺候処、狩野・大見・河津・仁科四口共杉苗木育方宜旨、統候而ハ檜茂ケ成ニ成木仕候趣、御林守御林附村々并炭請人万兵衛代のもの共々書付差出候間、場所見立三分一通も檜取交植付候様可仕哉、且植匂之儀者、河津・仁科両口之儀者八十八夜前植付、狩野・大見両口之儀者、八十八夜後植付候ハ、根付方も可宜、地味之様子相見候由一同申立候、依之此段申上候、以上

(天保一〇年)

亥三月

割印

御勘定所

江川太郎左衛門 印

冥加植栽の樹種は幕末になると、またほとんどが杉の苗木を植栽する様に固定化している。今日天城全山に見事な杉の大木が繁茂しているが、この時植えた杉であろうかと想像される。

④御風呂屋口御用炭と炭価

御風呂屋口御用炭とは、製炭請負人が江戸城本丸・西丸両風呂用木炭を納入する事である。請負人が両口で二名の場合は老ケ月つつ、隔月に交代で御風呂屋口迄搬入する。すなわち

老ケ月限持切、隔月納仕、御風呂屋口迄持込、諸入用共一式撰炭正味六貫目入、金老両ニ付拾八俵六分替

によって納入する約束になっている。炭価は当初一八俵六分替であったが、後には段々と値増の歎願をし、幕末には一五俵替で上納している。このほか幕府で随時入用の木炭はすべて御用炭請負人が供出する取り極めになっている。なお年間一〇万俵前後江戸に搬入される御用炭の売捌直段・方法は、請負誓約書に必ず左の様に明記される。

第5表 御用炭直段表

炭 価		売 捌 直 段	上 納 炭 直 段
年 代		金 1 両 = 付 上炭21俵 粉炭27俵	金 1 両 = 付 撰炭18俵 6分
享和2年~安政4年			
安政4年12月		20	18 6
安政5年		19	17
文久2年		17	16 6
元治元年		16	16
慶応元年		15	15

第6表 伊豆炭問屋直段 (江戸市中相場)

炭 価	極 上	上	中	下
品 等				
嘉永7年直段	1 両 = 付15俵	1 両 = 付18俵	1 両 = 付22俵	1 両 = 付28俵
是迄直段	13	15	20	23
今般引下げ直段	14~16	18	22	24~30

売捌直段金壹両ニ付、六貫目入式拾壹俵替之積りを以、問屋・仲問売等に者売渡不申、素人江直売仕候

炭木の不足は自然に奥地焼炭となり、当然乍ら生産費の増大を招き、御風呂口御用炭と同様、請負人は、再三炭価の値増しを要求した。第5表は、御用炭売捌直段および御風呂屋口上納炭の炭価の増加を表示した。

右の御用炭の炭価に対し、江戸市中での一般の伊豆炭の問屋炭価を比較すると(第6表、御用炭の安価である事が判明する。

当時江戸への入津木炭数は、最低でも百七拾万俵といわれているので、その拾七分の一である天城炭拾万俵の小売炭価を、幕府が如何に抑制したところで、たいした影響はなかったかも知れない。しかし御用炭を製炭させ、江戸市中で年間一定数量の木炭を、問屋經由でなく、直接素人に安価で売捌いた事は、一に幕府の物価統制の一助になり得たであろうかと考えられる。

註

(10) 天保九年一〇月より天保一〇年七月迄

(11) 文化一四年一二月「天城炭三郎平請狩野口〆三津浦津出置場困炭焼失見分之趣申上候書付」

(12) 伊東市史所収 秋須美区有文書「和田村重左衛門・藤左衛門御用炭掛

合内済享」

- (13) (2)の幕府御勘定所宛御請書中の、第一・五・六・七・八カ条目と内容同文。差出人は「天城山附村々名主・与頭・百姓代」

姓代」

- (14) 難破船による海難事故の時は、浦手形を提出する。

- (15) 天城炭運上金御勘定組伺書

- (16) 安政四年（一八五七）二月より文久二年（一八六二）一月迄五カ年取支決算書にも上炭四〇七、九七七俵に対し

無運上炭五六、一八三俵である。

- (17) 寺尾宏二氏論文「天城御用炭考」では、弘化四年の請負証文のうち

御運上金四拾八両之处、内拾八両ハ是迄之通御請負中御

免除被成下、三拾両宛年々十一月中ニ上納仕、炭ニて正

納被仰付候ハ、御差図次第可仕候

を引用せられ、「運上金を炭にて正納仰付られれば完納するところから、之を以てすれば御用炭は運上金を現物納とせし事が窺はれる」と論考せられている。また前掲の樋口清之氏の「日本木炭史」の中でも同様に「運上（その金額に当る木炭の現物納）」と書かれている。がしかしこの「運上金請取証文」の出ている安政四～五年の請負の時も、指摘されている同文の御請書を提出している。にも拘わらず金子で納入しているのは、やはり現物納は許可されず、金納であったと考える。

- (18) 文政二年卯閏四月「天城炭御請負人久左衛門代久兵衛申上候書付」

- (19) 文久元年「諸色直段引下」

炭木の制限

江戸時代に入ってから天城御林山では九樹種（松・杉・檜・榎・楠・樺・榎・栢・樺・梅）の御制木が指定されていた。炭材はこの九樹種を除外する事は勿論であるが、御制木中榎は白榎のみ炭材として伐採を許可されている。炭材として最初は檜・柵・桜・榊・楠・櫟（^赤櫟）・榎（白榎のみ）・水くさ・椿・山ならし・山桐・その・べうぶ・楓・猿すべり・あせは・小はせ・白うつ木などの下木・雑木四寸廻りより壹尺五寸廻り迄の木と規制されていた。のちにこのうち御制木の榎が差し留められ、かわりに大きさが四寸廻りより貳尺五寸廻り迄と壹尺緩和されている。炭木御制木の推移をつぎの史料は如実に物語っている。

一天城山御林炭焼出之儀、寛政四子年柳生主膳正掛ニ而吟味有之、同年々去々申年迄貳拾壹々年之内、五々年季ツ、請負、継年季三度御吟味有之、貳度目御吟味之節迄者、檜・槻・栂・杉・栢・栗等之上木者都而御用木ニ茂相成候ニ付、苗木迄茂大切ニ為仕、決而為伐不申、檜・栢・桜・楠・楓・猿すへり等之下木・雜木四寸廻リ々老尺五寸廻り迄、小木生茂り候場所斗伐透炭焼出被仰付、去ル卯年三度目継年季御吟味之節々炭木ニ伐採候木品之内、檜者御除ニ相成、其上去々申年御林改之節、檜之儀者一駄御林帳ニ茂御制木ニ候処、口山之分者、前々々伐出候処、以来者御制禁之旨村々江可申渡旨被仰渡、去酉年四度目継年季御吟味之節々檜木之儀者、白檜迄茂御差留ニ相成候ニ付、炭木ニ成採候者、檜・栢・桜・楠・椿・楓・猿すへり等之下木・雜木四寸廻リ々貳尺五寸廻迄小木生茂り候場所斗伐透炭木伐採、且上木ニ而茂節物・曲木等ニ而御用木ニ茂不相成分者、寸尺ニ不拘極印打渡伐採候積被仰付候処、檜之儀者前書之通白檜迄茂御差留ニ付、節曲も先ッ見合、檜類者一切差留置候得共、檜類一切無之候而者格別粉炭多ニ相成、請負人難儀之趣も申立、一駄檜木逆も節曲ハ御用材ニも相成間鋪哉与奉存候間、節曲・惡木之分者、炭木ニ為伐採候積、去酉年中伺書差出置候儀ニ御座候

(印) 右御尋ニ付申上候、以上

江川太郎左衛門 印

(文化一〇年
戌十一月)

御勘定所

右伺改方江出ス

檜の木は深山には余り成育せず、里に近い山口の谷間の沢に生育する樹種である。荒檜（一般にいう赤檜）と白檜の二種類あって、荒檜の方が木性がよく良質である。はじめはこの荒檜のみを制木に指定したが、文化一〇年（一八一三）には、白檜までも炭木に焼出す事を禁止した。檜木は製炭上において「雑木而已故炭メリ兼、其上山出并船中江戸へ

幕府御林山における林業生産（浅井）

薪等数度の取扱ニ而粉炭勝ニ相成⁽²¹⁾と檜木炭の必要性を唱え、また「檜木不焼立候而者炭怔相劣り、御風呂屋口上納炭ニも差支候趣⁽²²⁾」のため檜木の節物・曲木などの悪木分だけでも伐採を許可してほしいと請負人は懇願している。この願書には檜木伐木の条件として「別段為冥加、上木之内相応之木品植付被仰付候様」と提案しているが、これに対し幕府では「悪木伐取跡其外御林内木薄之場所江別段為冥加上木之木品植付、相済候ハ、右木銘・木数等年々可被相届候」と付札によって別冥加植栽を条件に許可している。この結果請負人の三郎平は、別冥加として赤松苗木五千本、久左衛門は赤松苗木式千七百本と檜苗木四百三拾本を植栽している。

この様にして漸く檜の節物・曲木が炭材として伐採は許可されたが、炭木の不足は依然として解消せず、林相は益々悪化し、嘉永二年（一八四九）十一月遂に請負人は「御林之儀者、宝曆度此節迄打続雜木伐透炭焼出方仕候故、追々雜木小林ニ相成、木薄之場所等茂御座候ニ付」とて炭木焼出場を江川太郎左衛門御支配所駿州富士郡・駿東郡富士山御林の内に變更したい旨を願ひ出る。その後嘉永四年三月にもこの事を再願したが、結局受け入れられずに不許可になった。しかし反面幕府では、御制木の曲木・節木の悪木や抜打などの炭木使用を緩和し、さらに請負焼出高年式万俵づつの減少などの処置をとって、当面の窮極を打開した。この様な強行策をとった幕府ではあったが、幕末には遂に箱根山に手をつける事になる。すなわち慶応二年（一八六六）御用炭を箱根山にて焼炭させ、天城炭と同時に焼炭させる様になった。箱根炭の製炭は慶応二年十二月より同三年十一月迄の一カ年間に、上炭・粉炭合計七千俵が天城炭請負人嘉兵衛の手によって焼出されている。ちなみに第7表は慶応三年と明治二年に至る間の御用炭が天城・箱根両山より焼炭された数量を表裏して掲出した。

註

尋ニ付申上候書付」

(20) 文化十一年十一月「天城山御林檜木炭木ニ伐採差止候訳御

(21) 文化十年「豆州天城山炭焼出檜木伐添伺書」

第7表 御用炭仕出地別出炭表

天 城 炭

出炭年代	品 種	上 炭				粉 炭							
		数 量	運 上 金			数 量	運 上 金						
慶応2.12~同 3.11		17,313	依金	両	分	永	文	2,097	依金	両	分	永	文
慶応3.12~明治元11		22,690		51	3	189		3,564		1	2	177	6
明治元12~同 2.11		31,182		68	0	70		3,563		2	3	101	2
				93	2	146				2	3	100	4

箱 根 炭

慶応2.12~同 3.11		6,351	依金	両	分	永	文	581	依金	両	分	永	文
慶応3.12~明治元11		513		19	0	53		37		0	1	214	8
明治元12~同 2.11		939		1	2	39		42				29	6
				2	3	47						33	6

(22) 文化十四年丑十二月「天城山御林炭焼出ニ付御尋之趣申上候書付」

四 製炭の実態

次に具体的な生産工程の実態について考究したい。天城炭といえは江戸市場においては、相当に上質の炭と評価されていた様である。「林屋筆記」⁽²³⁾にも

今江戸にて所用の炭に、伊豆の天城炭を上品とす。これ堅炭にて石竈を築きて焼く炭也、八王子・筑井(津久井)・青梅などより出すハ中品なり、上総・川越より出すハ下品なり、また佐倉炭として、性和にて疾く火興る物なり

と、天城炭は石竈法を用いた堅炭の上品なりといっている。天城炭の製炭法はどのように行なったかは、今のところ具体的に知る事が出来ないが、「静岡県林産物」⁽²⁴⁾には

宝暦年間、伊豆ノ人山本文之右衛門ナルモノ、紀州熊野地方ニ至リ、三ヶ年間炭焼ノ業ヲ習得シ、帰ヘリテ天城山ニ入り木炭ヲ製出セルノ古記アリとある。この山本文右衛門なる人は、那賀郡一色村の文之右衛門⁽²⁵⁾すなわち宝暦期の最初の請負人である。また一説には、明和年間に紀州尾鷲より製炭夫市兵衛を招いて習得したとも伝えられている。⁽²⁶⁾(御用炭の焼出は狩野口では明和年

間から始められている。現在昔の河津口にあたる白田に残存している炭焼竈より想察しても、おそらくこの熊野炭の製法に類似した石竈法によって、御用炭は焼出されたと考えられる。

江戸時代における炭焼法は、この紀州熊野炭焼法が一応の規準となっていたようであった。木炭の炭焼法を詳細に記録したものととして、現存唯一の史料といわれている薩摩藩の炭焼法を記した山元氏記録⁽²⁷⁾中には、薩摩藩で炭の品質向上を計るために、田中仁右衛門以下三名を紀州熊野地方に派遣研究させた時の研究報告書が所収されている。その中の一節を参考までに抄出する。

一竈脇水廻り石築床堅メ、空道出来ノ上、奥之方ヨリ七・八合木ヲ堅入、其上横ニ木乗セ、小枝ニテ天井ノ下地致ニ上工、穂長ヲ敷、能赤ミノ土ニテ天井掛方仕候、左右ノ土ヘハ成丈ケ水ヲ不_レ掛方ヨロシク、初メ壹尺壹式寸モ置、後ニハ六・七寸ニ打堅メ、竈ノロニテ堅木ニ火ノ不_レ付様焚火致、凡三・四日ノ内ニ相乾シ候事、但御国許ニテハ甲ト相唱、熊野ニテハ天井ト申候、備竈ハ焼出シノ目穴無_ニ御座_ニ候

以上の説明によって、紀州熊野流石竈法の工程の一端を知る事が出来る。

炭 竈

製炭法は、右の様に石竈法と仮定して、石竈一竈の大きさおよび生産量を、文政年間(第2表中の第⑤期)の請負人である久左衛門(大見・河津口)と弥右衛門(狩野・仁科口)両人の調書二通を左に掲出する。

久左衛門請負分

川津口狹乗入字諸坪炭試焼木数・貫目・俵数書付

(文政六年)
未十月

一竈大サ 長卷丈三寸
横卷丈
高六尺五寸

焼立木数三百四拾七本 但 四寸廻りハ式尺五寸廻り迄、木長平均五尺

此貫目千八拾五貫目

炭出高百五拾四貫目

此俵数貳拾八俵

但 山出改卷俵ニ付正味五貫五百目、縄俵口柴卷貫目、都合六貫五百目 内五百目見込増

内

上炭 貳拾四俵

粉炭 四 俵

右之通御座候、以上

未十月

右之通御普請役倉橋藤四郎御勘定所ニ差出候ニ付、此段申上置候、以上

未十月

天城山御林之内弥右衛門請負

天城山狩野口与市坂入字奥野炭試焼木数・貫目・俵数

一炭竈大サ 長卷丈卷尺
横九尺五寸
高六尺卷寸

御普請役 倉橋藤四郎

出 役 中村奎兵衛

焼高木数三百三拾貳本 但 四寸廻り貳尺三寸廻り迄、木長平均五尺五寸

此貫目千貳百八拾六貫五百目

炭出高百五拾九貫五百目

此俵貳拾九俵

但 山出改老俵ニ付正味五貫五百目、外縄俵口底柴老貫目、都合六貫五百目 内五百目見込増
内

上炭 貳拾三俵

粉炭 六俵

右之通御座候

（文政七年）
申閏八月

右之通諸色御掛り江御普請役坂儉次郎被差出候付、此段申上候、以上

御普請役 坂 儉次郎 印

申閏八月

中村奎兵衛

二通ともに請負人の報告書にもとづいて、御普請役が御勘定所に提出したものであるが、両者を比較してみると、前者（川津口久左衛門請負）は竈の大きさが後者に比べて少し大きく、また焼立木数も多い。にも拘わらず焼出高がやや少い。但し焼立の炭木の長さが平均五尺に対し、後者が五尺五寸、太さは四寸と二尺五寸廻り、後者は四寸と二尺三寸と明記され、両者の炭木の材積には余り差違がない様に思われる。それに調書には炭木の樹種の記載がないので、この点が焼出高の減少になったか疑問である。兎にも角にも右の調書によって天城御用炭は、一竈で大体二八・九俵の炭が生産される訳である。⁽²⁹⁾

天城山御林内での竈立は、勝手に増減は許可されず、幕府側のきびしい規制があった。享和年間には河津口三拾竈（白田・片瀬・梨本の三ヶ所）・大見口拾七竈・仁科口六竈・狩野口で拾七竈が許可されていたが、請負製炭の進捗に伴って幕府でも漸次増竈を認めた。文化五年（一八〇八）には大見口で拾五竈増の三拾武竈、河津口が三拾五竈迄の増竈を許され、さらに文化一〇年（一八一三）には、全山四口で百貳拾竈となった。⁽³⁰⁾しかし竈数の増加は、自然炭木の濫伐となり、林相は益々手薄となってきたため、同年には再び「貳拾竈相減、以来百竈を限為相建」と幕府は代官に厳命している。

現在天城山での明確な焼成法を記録した資料が発見出来ないで、その工程は不明であるが、他所⁽³¹⁾の焼出工程によると、原木を竈入れするのが一日、火附一日、火の釜口調節（炭化進行）四日、竈閉を六日目にし、消火冷却期間が三〜四日で、都合八〜十日目に竈を開放するとある。要するに一竈で焼出工程日数は約八〜十日間となる。これによって年間の焼炭生産量を類推すると、年間一竈で最底約一〇〇〇俵内外の炭が生産され、天城山全体で一〇〇竈として、年間約一〇万俵前後が製炭される事になる。この数量は全くの机上計算であるので、実際は全山でどの程度焼出されたかは不明である。がしかし少くともこの一〇万俵以上は充分製炭されていたのではないかと考えられる。

焼出高

つぎに天城御用炭の五ヶ年季請負製炭の実際の出炭高はどの様であったかを考察する。

第8表は七〇年間の年季請負期間の中より第①・⑤・⑨期を抽出して作表した。第9表は第⑩期の通商会社⁽³²⁾に引継がれてからの出炭数であるが参考までに掲示した。

以下第①期の第8表(1)を中心に述べることにする。第8表(1)は前述の如く、江戸商人久左衛門と在地の一色村惣請

第8表(1) 第①期総出炭高(享和2年12月~文化4年10月)

年 代 項 目		河 津 ・ 大 見 口 (久左衛門請負)			狩 野 ・ 仁 科 口 (一色村惣請負)			両口 合計
		享和2.11	文化2.11	5カ年	享和2.12	文化2.11	5カ年	
		文化2.10	同 4.10	合 計	文化2.10	同 4.10	合 計	
㊤ 焼 出	高炭	160,203	81,906	242,109	88,604	62,045	150,649	392,758
	上炭	134,394	69,110	203,504	75,647	52,607	128,254	331,758
	粉炭	25,809	12,796	38,605	12,957	9,438	22,395	61,000
㊥ 潰	高炭	2,249	2,001	4,250	2,330	6,801	9,131	13,381
	上炭	2,050	1,778	3,828	1,883	5,846	7,729	11,557
	粉炭	199	223	422	447	855	1,402	1,824
㊦ 焼 失	高炭	591	0	591	260	0	260	851
	上炭	506	0	506	179	0	179	685
	粉炭	85	0	85	81	0	81	166
㊧ 出 帆	高炭	145,632	88,221	233,853	68,872	68,181	137,053	370,906
	上炭	121,944	75,735	197,679	58,491	58,801	117,292	314,971
	粉炭	23,688	12,486	36,174	10,381	9,380	19,761	55,935
㊨ 小 以	炭	148,472	90,222	238,694	71,462	74,982	146,444	385,138
	上炭	124,500	77,513	202,013	60,553	64,647	125,200	327,213
	粉炭	23,972	12,709	36,681	10,909	10,335	21,244	57,925
㊩ 山方有 浜方	炭	11,731	(-8,316)	3,415	17,142	(-12,937)	4,205	7,620
	上炭	9,894	(-8,403)	1,491	15,094	(-12,040)	3,054	4,545
	粉炭	1,837	87	1,924	2,048	(- 897)	1,151	3,075
㊪ 江 戸 着 船	高炭	144,415	☆85,226	229,641	66,703	66,579	133,282	362,923
	上炭	120,831	73,368	194,199	56,690	57,273	113,963	308,162
	粉炭	23,584	11,858	35,442	10,013	9,306	19,319	54,761
運 上 金	金	479両	282両3分	761両3分	223両3分	225両0分	448両3分	1,210両2分
	永金	20文4分	214文8分	235文2分	54文9分	82分2分	137文1分	122文3分
	内半減運上金	3分	5両1分	6両1分	1分	0	1分	6両2分
㊫ 海 上 消 失	永金	245文4分	70文	65文4分	122文5分	0	125文5分	187文9分
	分	1,217両	☆195両	1,412両	2,169両	1,602両	3,771両	5,183両
	%	0.8%	0.2%	0.6%	3%	2%	2.5%	1.6%

の両者が、二手に別れて享和二年一二月より文化四年一〇月迄の中五カ年間の製炭を請負った時のものである。製炭請負高は久左衛門が一カ年五万五千俵、一色村惣請が年間三万俵である。表中㊥の潰炭高は、焼炭地の山元会所・津出場所などにおいて、貫目改の節に軽目俵へ足し炭したもの。㊦の焼失高は炭会所又は炭置場の火事などで焼失した分。㊩は㊫+

第8表 (2) 第⑤期総出炭高 (文政6年10月～文政12年7月)

年 代 項 目			河津・大見口 (久左衛門請負)			狩野・仁科口 (弥右衛門請負)			両口合計
			文政8年10	文政8年10	合 計	文政7年8	文政10年8	合 計	
			文政8年9	文政11年9		文政9年7	文政12年7		
			俵	俵		俵	俵		
焼 出 上 粉 出 帆 上 粉 外目輕炭=足炭 上 粉 山方・浜有 方・会上 粉	高	184,385	143,232	327,620	81,411	71,200	152,611	480,231	
	炭	156,767	118,655	275,422	69,384	59,771	129,155	404,577	
	炭	27,621	24,577	52,198	12,027	11,429	23,456	75,654	
	高	164,069	132,042	246,111	62,439	66,104	128,543	424,654	
	炭	137,110	109,684	246,794	52,644	56,448	109,092	355,886	
	炭	26,959	22,358	49,317	9,795	9,656	19,451	68,768	
	足炭	2,628	2,987	5,615	2,191	3,112	5,303	10,918	
	炭	2,316	2,510	4,826	1,875	2,699	4,574	9,400	
	炭	312	477	789	316	413	729	1,518	
	炭	39,795	34,231	74,026	30,585	31,179	61,764	135,790	
炭	36,760	30,771	67,531	26,583	28,091	54,674	122,205		
炭	3,035	3,460	6,495	4,002	3,088	7,090	13,585		

幕府御林山における林業生産 (浅井)

◎+①、②はA—E、HはD—Gを表示した。なお◎の江戸着船高中の☆印の八五、二二六俵は、当然乍ら着船高であるが、文化三年三月久左衛門の江戸新橋南大坂町炭置場が火事のため江戸到着炭のうち上炭二八〇〇俵が焼失し、この二八〇〇俵分を差引いている数量で、このことは運上金上納に関係してくるが、元来運上金は江戸着船高によって上納する。したがって契約上からは、この炭置場の焼失上炭二八〇〇俵も全額支払わなければならない。しかし久左衛門はこの時半減運上を願い出しこれに対し幕府勘定所は「是迄江戸表炭置場ニおめて焼失いたし例無之候得共、焼失炭并流失炭之分共、運上金半減上納」の特別処置を許可した。そのため運上金合計額は、この上炭二八〇〇俵が半減運上として計算されているために着船高より除外されている。

つぎに第8表の(1)(2)(3)を一覧すると、焼出高が請負高より少ない場合がある。請負高は

(1)の久左衛門は一ヶ年五五、〇〇〇俵、一色村惣請は三〇、〇〇〇俵

(2)の久左衛門は五〇、〇〇〇俵、弥右衛門は五カ年で二拾万俵

第8表(3) 第⑨期総出炭高(天保12年12月~弘化4年11月)

項 目	年 代	河 津・大 見・狩 野・仁 科 四 口 手 請 負 (嘉兵衛・万兵衛兩人請負)					合 計
		天保13年12	天保14年12	弘化元12	弘化2年12	弘化3年12	
		同14年12	弘化元年11	同2年11	同3年11	同4年11	
出 帆 残 高	炭	28,052	27,803	36,509	☆22,423	31,496	146,233
上 炭	炭	16,216	14,644	25,104	13,719	33,356	92,039
粉 炭	炭	11,836	13,159	11,405	8,704	9,140	54,244
焼 出 高	炭	126,441	150,350	117,541	113,166	78,552	586,050
上 炭	炭	107,803	128,255	100,123	98,910	68,814	503,905
粉 炭	炭	18,638	22,095	17,418	14,256	9,738	82,145
出 帆 高	炭	119,908	134,375	146,423	98,989	84,137	583,832
上 炭	炭	104,167	116,605	127,899	86,430	73,577	508,678
粉 炭	炭	15,741	17,770	18,524	12,559	10,560	75,154
足 炭 減 高	炭	6,782	6,718	7,321	4,951	4,207	29,929
上 炭	炭	5,208	4,941	5,469	3,693	3,416	22,727
粉 炭	炭	1,574	1,777	1,852	1,258	791	7,252
難 船 流 失 高	炭	0	551	53	153	0	757
上 炭	炭	0	519	46	150	0	715
粉 炭	炭	0	32	7	3	0	42
山 方 有 炭 高	炭	27,803	36,509	☆20,253	31,496	21,704	137,765
方 上 炭	炭	14,644	20,834	11,813	22,356	14,177	83,824
方 粉 炭	炭	13,159	15,675	8,440	9,140	7,527	53,941

(註) ☆山方有炭高の数量と翌年の出帆残高の数量が合致しだいのは、弘化2年11月~12月にかけて増炭があったためである。

すなわち一ケ年にすると四〇、〇〇〇俵
 (3)は一手で一カ年拾万俵
 など区々であるが、請負高に対し焼出高
 不足の節は、詫状と共に左の様な焼延願
 書を提出して、必ず焼不足を償還する事
 を誓約し、実行しなければならなかった。

以書付奉申上候

一天城山御林炭焼出御請負之儀、先達
 而も申上候通、当年之儀度々之出水
 ニ而道橋等損、引統麻瘡流行仕、炭
 焼駄賃附人足至而少ク御座候付、尅
 ケ年御請負高三万俵之内、八千俵程
 も焼不足可仕旨申上候処、段々御利
 解之被仰渡御座候付、手先之者共江
 厳敷申渡、出精為仕候処、別紙之
 通、上炭・粉炭ニ而式万四千九百七
 拾七俵之焼高ニ罷成申候、可相成儀
 ニ御座候ハ、右焼不足之分、来子

第9表 第⑩期（通商会社請負分）出炭表

年 代	数 量	上 炭				粉 炭				総出炭高
		数 量	運上金額			数 量	運上金額			
明治3年11月~12月		1,026	金 3	兩 78	80	金 64	兩	分	1,106	
明 治 4 年 1 月		1,753	5	1 9	94		75.2		1,847	
	2	7,064	21		192	724	0	2 79.2	7,788	
	3	1,626	4	3 128	277		221.2		1,903	
	4	3,256	12	1 218	379	0	2 106.4		3,635	
	5	105		2 130	22		35.2		127	
	6	2,388	14	1 78	390	0	2 124.0		2,778	
	7	2,447	14	2 182	263	0	1 170.8		2,710	
	8	366	2	0 196	65		104.0		431	
	9	1,315	7	3 140	147		233.2		1,462	
	10	557	3	1 92	73		116.8		630	
	11	736	4	1 166	61		97.6		797	
	12	868	5	0 208	82		131.2		950	
明 治 5 年 1 月		1,879	11	1 24	138		220.8		2,017	
	2	1,548	9	1 38	81		129.6		1,629	
	3	979	5	3 124	118		188.8		1,097	
	4	1,409	8	1 204	152		243.2		1,560	
	5	60	0	1 110	10		16.0		70	
	6	1,006	6	0 36	85		136.0		1,091	
	7	1,064	6	1 134	81		129.6		1,145	
	8	354	2	0 124	39		62.4		393	
	9	157	0	3 192	16		25.6		173	
	10	617	3円70銭2			66	10銭56			683
	11	340	2	04 0	36		5 76		376	
明 治 6 年 1 月		946	5	67 6	40		6 40		986	
	2	1,107	6	64 2	118		18 88		1,225	
	3	601	3	60 2	38		6 08		639	
	4	174	1	04 4	10		1 60		184	
	5	373	2	23 8	32		5 12		405	
	6	43		25 8	29		4 64		72	
	7	231	1	38 6	50		8 00		281	
	8	534	3	20 4	22		3 52		556	

幕府御林山における林業生産（浅井）

十月迄迄々年御請負高二而焼増候様仕度、此段御堅慮之程奉願上候、以上

(享和四年)

亥十一月

天城山炭御請負人

豆州那賀郡一色村

惣代 嘉右衛門 ⑥

安右衛門 ⑥

谷口吉蔵様

武右衛門 ⑥

しかし、焼不足が累積すると製炭者は請負高を完納する事は困難となる。幕府は再三厳しく督励するが、結局最終的には請負を取り止めるか、または請負高を減少する処置をとらざるを得なくなる。とはいえ兎も角も難航しながら所期の目的である両手合わせて一〇万俵前後を、なんとか確保しつつ年季請負製炭は持続された。

表中⑥の海上消失分は、両手を比較してみると、後者の一色村請分の方が多量である。これは搬出地が江戸より遠距離のためと思われる。前者は東海岸の白田・片瀬・川津・伊東などの浜より出荷しているが、後者は西海岸の仁科および松崎が搬出の中心地である。したがって後者は伊豆半島南端の石廊岬を廻って江戸へ廻漕するため、自然に難破の度が高くなる。難破率が海上消失炭の増率を招く結果となる。

御用炭の運送は、特定の御定積船が指定され、御用炭の旗をつけて嚴重に保護されて海上輸送をした。御用炭船は主として土地の船主または江戸の船主と、製炭請負人の間で契約され、賃銀も相対で定められている。さきの請負人久左衛門が御用炭を伊東浦より津出しする際に、土地の船主和田村重左衛門との契約では「一天城山御用炭伊東津出し之義は八千俵と見積り……炭百俵に付銀七匁つつ」と取り極めてゐる。伊東浦は江戸迄の最短距離の搬出地であるので、この「百俵銀七匁」は伊豆天城炭の運送賃としては最底賃銀と考えられる。船の大きさは余り大きくなく、川

津口御用炭の廻漕を請負った下田町船主の請書には

一 伍太力 壹艘 但五百石積

一同 壹艘 但六百石積

一同 壹艘 但五百石積

右の三艘をあげているが、大体五百石積前後の船が使用されていたと考えられる。

これら御用炭請負人と契約して運行している御定積船は、必ずしも天城炭のみを船積しているのではなく、他の物資も混載している場合がある。難破した時の浦手形の内容をみると「御用炭并町人商売炭・切石・砥石品々積」とある如く、他の荷物と一緒に廻漕しているが、この場合でも荷出の数量は一艘で凡そ五百俵前後の割合で積荷されている。しかしこの御定積船の特権を利用して、御用炭を積まずに他の荷物のみを輸送して発覚した時、それがたとえ御年貢米廻送であっても幕府は始末書をとって厳罰に処している。

製炭労働者

炭焼のはじめは、百姓が農業を営みながら、農閑期に入山して製炭する所謂農間余業であった。ところが製炭事業の拡大につれて、製炭を専業とする製炭夫が出現した。彼らは四口の御用炭焼炭の窯場を転々と廻って生活する様になった。こうして出現した製炭夫は、在地の百姓が製炭技術を身につけて専業化した者が大部分である。天城山での炭焼職人の数は、幕府勘定所の調書によると、御用炭の最盛期である文政年間に、約三五〇人余も伊豆に在住していた事が判明する。もっともこの人数の中には、農間余業の百姓も含まれていると考えられる。専業化した製炭労働者は、製炭技術の優秀さを認められて、次第に他国への出稼ぎを行う様になり、そのために却って御用炭製炭に難渋を来す結果になったので、請負人はもとより幕府勘定所でも、他国出の製炭夫を厳しく制約した。つぎに掲げる史料

は、上州前橋藩士より江川代官所宛に、焼炭夫の出張方の幹旋を懇願したものである。

松平大和守家来と差越候書面写

口上之覚

旦那領分上州前橋表々焼出御用ニ相納候炭焼職雇方、初発々太田総次郎様御領分豆州加茂郡大隅村名主奥右衛門と申者相頼置、年々焼立高ニ応し、職人抱人毎年春二、三月頃前橋表山先江奥右衛門同道召連罷越、炭竈相立候仕法ニ付、当年之義も同様、職人共相撰雇方示談仕、前橋表江召連罷越申度、右ニ付御関所通手形相渡呉候様、村々役人共江申談候処、近年天城山御用炭焼出職人共払底ニ而、御差支相成候間、他国持差出候義不相成旨、江川太郎左衛門様御役所々被仰渡御座候旨ニ而、御関所通手形相渡不申、私領村々之義も同様ニ而、召連候義出来不申、手筈大ニ相違仕候へ共致方無御座、余義手人之分小人數召連、余者超年仕居候もの共ニ而焼立取掛候間、多分者出来不申旨奥右衛門申出当惑仕候、乍去、当年之義者是迄焼囲置候炭多分ニ御座候得共、來寅年ニ至候而、当年同様ニ而者炭焼立方出来不申、殊ニ上州御用炭之義者、伊豆之職人ニ限り、外国之職人にてハ焼立出来不申ニ付、御差支相成申候、依而者以來奥右衛門々雇入候職人共之義者、是迄之通他国持出来候様、江川太郎左衛門様并最寄地頭方江御許可被成下度奉存候、此段奉願候、以上

松平大和守家来

豊島善右衛門

伊藤 久太郎

同様の願書を勘定所宛にも提出しているが、この歎願書は、天城山御用炭製炭者にとっては

大和守領分前橋江出稼差免候得者、天城山附村々一同大意見習前橋江罷出候与申唱、駿・遠・甲・信州ヲ始、諸国之炭焼賃銀宜方江而已罷出候様成行候而者、自然天城山炭出方減少、御差支者眼前ニ付

と在地側では大いに難色を示した。その後再度の歎願により、江川代官も「此度ニ限り三拾人程も御差遣相成候事も、跡々焼出方厚世話仕候ハ、御差支も有之間敷哉ニ付、其段可然御挨拶被仰遣候様仕度」との返答を出し、幕府もや々と三拾人の派遣方を許可している。右の願書中で「殊ニ上州御用炭之義者伊豆之職人ニ限」と天城製炭職人の優秀性を述べていることは、同時に伊豆の製炭法のすぐれていることを物語っている。

註

(23) 高田与清著「日本經濟叢書」所収

(24) 第一章第二節副産物ノ項

(25) この文之右衛門は有名な炭山師であつたらしい。埼玉県史

第六巻に

(金哲)

「安永四年に、源内は秩父に豊富なる木材を以て木炭の製産を考案し、同年夏試みに二千俵の木炭を焼出させたが、その有望なるを見て、其十二月には、源内は伊豆の炭山師山本文野右衛門と合同し、秩父郡久那村の岩田三郎兵衛・喜左衛門の兩人を出願人として木炭焼出しの事を始め、諸費用を控除せる利潤の一分を出願料として与えることとした」

とあるにより、埼玉県秩父御林山内でも、平賀源内と合同して、この文野右衛門は焼炭を行なつてゐる。

(26) 「田方郡誌」市兵衛は天明七年(一七八七)歿、湯ヶ島本谷入字杉本に葬る。

(27) 「日本林制史資料」所収

(28) 「紀州熊野炭焼法一条并山産物類見聞之成行奉申上候書付」

(29) 「紀州熊野炭焼法」によると(前出「山元家記録」)

大竈出来炭 六貫五百目俵

凡式拾俵

中竈同

同

凡拾六・七俵

小竈同

同

凡拾毫・式俵

と記されているので、この天城山での竈は紀州熊野炭でいうと、大竈より大きいことになる。

(30) 文化一〇年「天城山炭焼出取斗方何書」

(31) 紀州熊野焼成法

(32) 「伊東市史」所収 玖須美区有文書「御用炭掛合内落写」

(99) 文政十二年十月「天城炭焼職人調書」

(34) 「天城山炭焼職人上州前橋江差出方差支有無御尋ニ付申上候書付」

おわりに

以上七〇年間に亘る天城御林山における御用炭年季請負製炭の概略を考察したが、請負人は種々の義務を遂行しながら製炭し、江戸に廻漕した結果、どの位の利益を得、またどの様な特権を取得したか。これらの詳細は、管見では確認する事が出来ない。炭木の原材料費は無償であるが、それを製炭する費用、所謂総生産費に不明の点が多い。幕府の嘉永五年の請負概算書にも、

一炭拾万俵

老ケ年焼出し高

此代金四千七百六拾老兩余

此御運上金三百兩

但 焼出賃・縄俵代・駄賃・船賃・麓積所・納屋・会所・山道造・江戸売場入用其外一式諸懸り共、金老兩ニ

付式拾老俵替売捌、炭老万俵ニ付御運上金四拾八兩之處、内拾八兩ハ是迄之通御請負中御免除被成下、三

拾兩宛年々十一月中ニ上納仕

粉炭老万五千俵

代金五百五拾五兩

此御運上金拾式兩也

但上炭老万俵ニ付粉炭凡老割五分之積、粉炭老万俵ニ付金八兩宛俵数ニ応じ上納仕、金老兩ニ付式拾七俵替

ニ売捌可申候

上炭拾万俵で代金約四千七百兩のうち運上金三百兩を上納し、差引四千四百兩が残るが、この中で運送賃を含めて

湯ヶ島会所調生産費諸掛内訳

費用		金額	
費目		銀匁	匁
割賃銀賃掛代他料銀錢		1	8
金駄共諸掛代他料銀錢		2	3
夫出駄中継屋入世話口計		7	0
上津場・納請用運所		5	0
上げ場・橋普入上戸合		1	7
運焼山山津山道会海江		5	0
		4	0
		0	0
		7	5
		歩0	
		銀匁7	匁5

の総生産費の合計が明らかにされていない。

ちなみに狩野口である湯ヶ島会所調（平成三年）の御用炭俵当りの諸掛りをみると、（但し上炭炭俵風袋とも五貫匁とあるが、御用炭炭俵は六貫五百目である）炭俵当り上記の生産費で、請負高拾万俵の総生産費を類推すれば、簡単に算出可能の様であるが、この生産諸掛りには不審な点が多い。海上運賃・山下げ津出し賃などは、津出し地の場所によって、高低が生ずる筈である。この湯ヶ島は津出し路まで山路六里半、その上悪路であるので、津出し賃が一匁七歩かかっている。竈場が海岸に近い土肥村では錢三拾貳文となっているので約三倍になるが、これらの点にも疑問が残る。

竈場より津出し迄は山道のため普通馬にて搬出するが、積載量は二、三俵である。これは道筋の村々が請負って搬出しているが、仁科口の松崎村では、毎月六・七・八日に竈元から製炭量を村々に通告し、十日より村の百姓が割当てられて搬出した。

また海上運賃でも、江戸に最も近い伊東浦ではあるが、御用炭百俵につき七匁とあるのに、湯ヶ島の炭俵では差違が甚だしい。これらを考え合わせても、湯ヶ島会所調の炭俵当りの諸掛り費用で、全体の総生産費を概算する事は困難である。これに加うるに冥加植栽の苗木代および植栽費・竈仕立賃など正確なデータが得られず、請負人の総支出費を算出する事は不可能である。しかし請負人は一定の利潤もしくは、何らかの反対給付の利点があったと考えられる。大蔵永常の「国産考」にも、炭について

三年目づつ間おき伐ても、老株より七、八十俵の炭を焼出せば、老株銀貳匁づつと見ても八十俵にては百六十目也半分雑用と見ても八九十目の利分也、十株あれば、八九百目也、是を三年目に伐取と見れば、一ヶ年凡三百目づつ

の得分にあたるなり

と焼炭による得分が書かれている様に、請負製炭による両者（幕府・請負人）の利得を考察する事が、今後に残された大きな課題である。それには請負人の素性をまづ解明する事が先決であると考ええる。

とまれ、幕府は天城御林山での年季請負製炭によって、天城炭を本丸・西丸御風呂屋口御用炭と称して上納させ、また年間一定量の出炭を義務づけて、製炭事業を嚴重に管理した。そしてこの事業を遂行することによって、幕府が江戸における木炭の確保と廉価市販を行ない、延いては炭価引下げと価格安定を策したと推察される。これらは幕府が御林山に対する林業生産物としての木炭政策の一端をうかがわしめるものである。

追記 本稿は昭和四式年度文部省科学研究費（総合研究）による史料館の共同研究「江戸幕府代官領の総合的研究」の分担課題成果の一部である。

